

ウルムでのショル兄弟と仲間たち

ドイツ南西部、バーデンビュルテンベルク州の一地方都市ウルムは、街の東をドナウ川が流れ、対岸にはバイエルン州のノイウルム市を臨み、当時も今も落ち着いた旧市街をもつ古くからの集散都市です。中世のウルム市民は、その篤い信仰心故でしょうか、街の中心広場に大聖堂を建立し、その石塔はドイツでも最高の高さを誇るものとして有名です。ショル兄弟は、10代の多感な時期をこの街で過ごしました。彼らが通っていたギムナジウム(普通高)は、21世紀の今、ショル兄弟の名を冠しています。さらに郊外のユースホステル(DJH)の名にも、二人の名が刻まれています。そして大聖堂の裏にも、ショル兄弟の名をもった広場があったりします。この広場は、戦時中、ウルム随一の繁華街の一画でした。「白バラ」のピラは、この場所でも撒かれたのです。ここに、ウルムで入手した、『ウルムでのショル兄弟』と題するパンフレットの邦訳を試みました。

ハンスそして、ゾフィー＝ショル

「自由を！」これは、ハンスが発した最後の言葉です。1943年2月22日午後5時近く、ミュンヘンの拘置所でのことでした。ハンスがこの言葉を発しながら、その頭をギロチンの斧の下に差し入れたのに続いて、その妹ゾフィーもまた死へと向かいました。

そのわずか数時間前、人民法廷の長官、ローランド＝フライスラーは、ハンスとゾフィー、そして共にミュンヘン大の学生であったクリストフ＝プロープストに死刑を宣告したのです。その罪は、国家への反逆を試みた陰謀に対してでした。3人は抵抗グループ「白バラ」の一員でした。その他のメンバー、アレクサンダー＝シュモレル、クルト＝フーバー、そしてヴィリー＝グラーフも罪に問われ、4月19日と7月13日に死刑となりました。

白バラとは

白バラの動きは大戦さ中の42年、ミュンヘンで始まりました。その前、40年の秋に、ウルム出身の22歳の医学生ハンスが1学年先輩のシュモレルと出会い友人となりました。シュモレルの親の家で、彼らは会合をもち同じようなテーマで討論を続けました。その中にシュモレルの学友プロープストもいたのです。テーマは神学や哲学、倫理そして文学などでした。

彼らのナチス体制への抵抗の決意は、ウルムでのショル一家の郵便箱に投函

された匿名のパンフレットに強く影響されました。そのパンフレットには北ドイツのミュンスター市の司教、クレメンス・アウグスト・グラフ・フォン・ガレンによる説教も含まれていました。説教は精神病患者を死に迫いやる蛮行を証言し、ナチス体制のテロに抵抗するよう、読者に促していました。

これらのパンフレットの匿名の配信者はウルムのギムナジウム(高校に当たる)の生徒、ハインツ＝ブレナーでした。41年10月の初旬から、特定の住所に宛てて、彼はそのパンフレットを配り始めました。彼はハンス＝ヒルツェルやフランツ＝ミュラーと言ったショルの友人たちのクラスメイトだったのです。彼らは白バラのパンフレットを配るショルたちの積極的な活動家となります。これらに関して、人民法廷の長官フライスラーは、彼らを第二次裁判において投獄することになります。

ホロコーストの知らせ

「白バラのパンフレット」は、1942年の5月と6月、ハンスとシュモレルが書いて配った最初の4つのアピール文のタイトルとして使われました。その最初のものには、「何事もより寛容で批判精神をもった文明国の人々を貶めてはならない。無責任な言説と暗い情念、そして非合理的な衝動によって広められたものとして、そのような主張を受け入れるべきではない！」それはナチス体制への消極的な抵抗を意味していました。第二のパンフレットでは、ポーランドのユダヤ人が30万人殺されたことを伝え、「ここに私たちは人類に対する最も非道な犯罪を見る。これは人類の歴史で他に匹敵するものがないほどの虐殺である。」と……。四つ目のパンフレットではナチス体制へのサボタージュを強調し、その終わりには、「私たちは沈黙しないだろう。あなたの良心に訴え続けるだろう。白バラはあなたに平穏を与えることはないだろう！」とも述べています。

1942年7月の終わりから11月の初めまで、シュモレルとショルは東部戦線に従軍するため徴兵されました。彼らはそこでドイツ西部、ザールブリュッケン出身のグラフと出会い友人となりました。彼らの帰還を待つゾフィーがそうしたように、グラフも仲間に加わりました。彼女もそしてその年の5月にミュンヘンに移って来た音楽科のフーバー教授も、これに参加したのです。

5番目のパンフレットの主張、それはフーバー教授に触発されてハンスによって書かれたものですが、より厳しいものとなりました。その題名は「ドイツにおける抵抗運動」と、白バラをより実践的な運動へと変化させるものでした。白バラは実際この時から、他のレジスタンス・グループとの連絡を試みるようになったのです。

6 番目のそして最後のパンフレットはスターリングラードでのドイツ軍の大敗北に言及し、公然とナチスへの抵抗を要求するものでした。43年2月18日、ハンスとゾフィーはミュンヘン大学の大教室の前に、このパンフレットを置きました。ゾフィーがその残りを2階から玄関ホールへと撒いた時、二人の行為は発覚し、非難を浴び、逮捕されました。ゲシュタポはすぐに白バラの残りのメンバーも拘束したのです。

ショル家の人々

何がハンスとゾフィーにこうした大胆な行動をとらせ、自身ばかりでなくその友人をも処刑へと向かわせたのか？ 高邁な精神を伴う自発的な行為と言えるのか？ 死を意識するような危険へのチャレンジとは？ 私たちは、その答えをハンスとゾフィーの複雑なパーソナリティの中に見出すのではと思います。これよりだいぶ前のこと、彼らの外向的な性格は、ウルムで一つの騒ぎを引き起こしました。彼らはすでに人目につく行動をとったりしていましたが、当時はナチス配下の青年組織、ヒトラー・ユーゲントの活動家であり有力なメンバーでした。彼らの振る舞いは、良識ある市民からは全否定されるものでした。

両親であるロベルトとマリアンネ＝ショルは、1932年に5人の子供たちとともにルードヴィヒスブルクからウルムに転居してきました。父のロベルトは税理士で、1917年には、小村インゲルハイム・アルトミュンスターの村長に就いたこともある人でした。その娘インゲは17年に、ハンスは18年に誕生。20年に、ロベルトはフォルヒテンベルクの町長にもついています。この街で残りの子供たちが誕生しました。エリザベスが20年に、ゾフィーが21年に、そして末のヴェルナーが22年に誕生しています。

ヒトラー・ユーゲントだったショル兄弟

ヒトラーが1933年に権力を掌握した時、ショル家の子供たちは、父の明確な反対にもかかわらず、強くヒトラー・ユーゲントに魅かれました。長女のインゲは、自身とその兄弟が魅かれた、その如何ともしがたい誘惑について、その著『白いバラ』に書いています。「私たちは祖国と同志愛、共同体としての国家、そして愛国精神といったものを何度も聞かされました。これは私たちに強い印象を与えたのです。そしてこうした言葉を学校や街頭で耳にした時、強い注意を払いました」。ヒトラーは、祖国に偉大さと繁栄をもたらしてくれると言われました。他の誰が、その問題を解決してくれるだろうか？と。加えて、旗を振るとか、その目を一点に向けるとか、行進するバンドや愛国歌を備えた若者の

一団というものが備わっていました。こうした同志愛と言ったものが、当時の青年たちに大きく影響を与えました。彼らは、その一員になりたがったのです。

ショル家の子供たちがドイツ少女同盟やヒトラー・ユーゲントに入って指導的な立場についてすぐ、ハンスとゾフィーは特に実践的に勇気や厳しさを示し頭角を現しました。そして自らと仲間とに限界に挑戦させるような指向を示しました。こうしたことに大きな昂揚感が与えられ一部の人たちからは熱狂的な支持を得ました。しかし、他の者から(特に両親から)は否定されたのです。そして他の兄弟や若者たちからもハンスとゾフィーは怖がられました。その表われた二つの側面は、象徴的な性格を帯び、今も当時を知る人々に忘れがたい印象を与えています。一方で、ハンスが極端に短いズボンをはいていたこと。それを冬中にさえはいていたことで、他の少年たちが、その容貌と慇懃さを真似ていたことは、教員たちをがっかりさせました。

一方のゾフィーは少年の髪型をからかわれながら、同じ年ごろの子供たちとは大いに異なるいでたちでいました。こうした格好は、一種の自由の形でした。それはゾフィーを女の子らしい髪型がどうのこうのと言う規範を超えて、自然のままを楽しむ人間にさせてくれました。ゾフィーは兄弟たちと同様に一番高い樹の天辺によじ登り、鬼ごっこで草ぼうぼうの茂みを這うように前進したりしました。これらはすべて大人たちの考える良き市民の基準からかけ離れたものでした。彼女はすぐに、「男の子」というニックネームをいただいた位です。

彼らの仲間の中では、ハンスとゾフィーが食料や金銭の共有と言ったあらゆる理想を追求しましたが、これは彼らに共産主義者か純粋なクリスチャンかのイメージを与えるものでした。誰もが、その理想の追求を是とするものではなかったのです。

ドイツ青年協会(dj1.11)

彼らの態度は、1929年11月1日にシュツットガルトでエバハート＝ケーベルによって創設されたドイツ青年協会(dj1.11)の理念に合致するものでした。別称を「tusk」と呼びました。青年組織の他の支部と同様に、djは34年には解散させられました。しかしながら、その精神はヒトラー・ユーゲントの中にも生き続けました。ウルムの青年組織は、33年にハンスが加わると、その組織はdjの以前のメンバーによって構成されたのです。この行動スタイルは、ハンスに最後まで影響を与えました。自由を求めるロシアやその他の国の歌、果てしない放浪、文学と言ったものは、ハンスやゾフィーにときめきと言ったものを与えました。これらすべては、ナチスの国家社会主義とは、何の関係もないものでした。それは若者が感じる「憧れ」であり、女神を象徴するため、ハンスの書き物の中には白いバラが用いられました。ヒトラー・ユーゲントと彼らの考え

の矛盾が明らかになるのは、時間の問題でした。

1935年のニュルンベルクでのナチス党大会で、ハンスは発見と気づきの時をもつ経験をしました。そこで彼は4000人のウルムの青年の代表として、旗を振りながら行進しました。その大会の演説は彼に初めて、ヒトラー・ユーゲントに自身が反対していることを気づかせました。それは彼が心中に抱いていたロマンチックな自由とは何ら無関係なものであると。この結果、ハンスはユーゲントの中にわずか10人ほどのdj.1.11グループを立ち上げました。この動きは、最後には37年に彼の兄弟姉妹が逮捕される事件へとつながったのです。逮捕拘束は数時間続きました。法廷は、ハンスに青年組織を続けることを許しませんでした。38年の恩赦によって、この締め付けは解除されたのですが・・・。

ハンスとゾフィーについてのグループ立ち上げの影響は、宗教組織がそれを緩和しました。ウルム近郊在住の若きオトル＝アイヒャーとの友情は、彼がカトリック教会の抵抗運動に近かったこともあり、テオドール＝ヘッカーやカール＝ムートのような神学者と出会うことになりました。こうした新しい視点は、ハンスとゾフィーの心に、豊かな思想的背景を与えることになりました。よって立つ信仰は、白バラのパンフレットのメッセージの表現にも見出されることになります。

ショル一家の戦後の軌跡

ショル兄弟の処刑の後、残りの家族は、戦場にいたヴェルナーを除いて、全員拘束されました。父ロベルトは、18か月の投獄となりました。家族は迫害され、ウルムの西方、黒い森地方に逃れて行きました。戦争の終わりを迎え、ウルムに進駐した連合軍は、ロベルトを解放し、45年6月には新しい市長に彼を任命しました。

ショル家とその仲間たちは、ウルムに永く続く足跡を遺していきます。インゲは、ショル兄弟と友情を分かち合ったアイヒャーと結婚します。彼は39年の秋以来、ショル家と近い関係にあったのです。アイヒャーは世界的に高名なデザイナーとなります。戦後の彼は、ウルムにおける知的な教養サークルの先導者でした。彼はウルムの社会人教育センターでの霊的、精神的な師として知られました。この組織を妻のインゲが創設し管理者となったのです。

これに加えて、アイヒャーは、今は語り草になっているデザイン学校を創設しました。彼が戦前ハンスたちと話していた学校を、インゲらの協力もあって実現させたのです。資金的には、アメリカ政府がインゲ設立の『ショル財団』に100万マルク(今の物価で数億円?)の寄付を与えて成立したものです。それは、ショル兄弟が戦前構想していた新しい自由を実現するための原資となったものでした。

以上

戦後のドイツでは、敗戦の現実を前にしても、ナチスと自らの責任を問う声は、なかなか表面に出て来ませんでした。やがて、学生たちが立ち上がった1968年の学園闘争を機に、自らの国家の否定的な面も明白にさせて行こうという機運が盛り上がりました。

そんな中で、ヒトラーの最後を見取った秘書のトラウドゥル＝ユングは語りました。「私自身は、ホロコーストなどナチスの負の側面を見ることなく生きて来ました。しかし、だからと言って、その責任は免れないでしょう。そう思うきっかけになったのは、あの恐ろしい大量虐殺が続いていた大戦末期、これに反対して勇気をもって立ちあがり、ナチスへの反抗を呼びかけた若者がいたこと。しかも、自分が暮らしたミュンヘンに彼らの足跡があったこと。同じ時代を生きたのに、片や真実を見る目がない私がついて、その一方に真実を見つめ続けた「白バラ」のような青年たちがいたこと。これを知った時、ようやく自分が見たナチス第三帝国を否定する姿勢に転じた」のだと・・・。

白バラの運動は、42年から翌年のわずか数か月の出来事でしたが、南部の大都会ミュンヘンから始まり、遠くは中部の都会フランクフルト・アム・マインにまでビラがまかれる規模でした。その途中にある、ここウルムでも、シオル兄弟の出身地だったこともあり、協力者もいたわけで、こうした抵抗運動に足跡を残しています。



シオル兄弟が暮らしたウルムの家 右側の建物の2階を占めた。Olga 通り 139 番地